

ソウル国立大学校看護科学研究所第6回国際カンファレンス

影山 隆之 Takayuki Kageyama

大分県立看護科学大学 専門看護学講座 精神看護学 Oita University of Nursing and Health Sciences

2006年4月4日投稿, 2006年4月18日受理

キーワード

生物行動学的看護学研究、韓国、東アジア、脳卒中、認知症

Key words

biobehavioral nursing research, Korea, Eastern Asia, stroke, dementia

1. はじめに

ソウル国立大学校看護大学において、2005年10月27～28日に、国際カンファレンス "Stroke and Dementia Care" が開催された。この会議に出席する機会に恵まれ、韓国をはじめとする東アジアの数カ国および米国からの研究者と親しく交流することもできたので、その様子を紹介させていただきたい。

ソウル国立大学校看護科学研究所（看護大学の研究部門）が主催する第6回国際カンファレンスに位置づけられたこの会議は、韓国科学技術アカデミーの "Brain Korea 21" というビッグプロジェクトの一環として開催された。この研究プロジェクトは特に若手研究者の活動を奨励するものだったということなので、おそらく脳科学に関する多くの分野にわたって相当額の研究費が投入されたのではないかと想像する。このうち表記の脳卒中と認知症に関連する領域については、同研究所が中核となって推進し、結果的に博士論文2編、修士論文5編が実を結んだとのことであった（正確に言えばここで dementia と言っているのは、疾患名としての "認知症" を指すというより、広く "痴呆症状" を指すのだと思われるが、本稿では暫定的に認知症と訳したことをお断りしておく）。そこで、これらの研究成果の発表会に、外国からも研究者を招いて研究交流を深めようという趣旨で、国際カンファレンスが企画されたという。私の勤務校が同大学と学術交流協定を結んでいる関係で、お招きを受けて私も出席の榮に浴することができた。韓国以外からの参加者は、私の他に日本から1名、台湾・香港から各1名、中国から2名、そして米国から2名であった。

2. 研究講演の内容

初日はまず午前から午後にかけて、外国参加者による講演が5題続いた。演題は、ワシントン大学 P Mitchell 先生による基調講演「ニューロサイエンスにおける生物行動学的看護学研究」、東京大学の田高先生による「認知症高齢者のための看護介入」、国立台湾大学 MF Lou 先生の「施設に入所している認知症高齢者の栄養状態」、香港工科大学 C Lai 先生の「認知症を有する人々の生活史」、そして私の「Alzheimer病を有する高齢者の夜間頻尿と睡眠障害」と続いた。聴衆はおそらく100人ほどで、韓国内の諸大学・病院から駆けつけた方々と、ソウル国立大学校の大学院生が中心のようだった。

今回のカンファレンスでは全体を通じて、人間にとってのもっとも基本的な営みである、「食べる」こと、「排泄する」こと、「眠る」ことが主題になったとも言える。上の基調講演において Mitchell 先生は、「これらの営みが脳卒中・認知症などを患った人たちにおいてどのように変容しているか、そこにどのようなケアを提供するとどのような変化が現れるか、その変化がケアの対象者の属性によってどのように異なるかを探求することこそ重要課題である」とし、「これらの営みの有様を'実践現場において'評価するための手法(指標)を確立すること、あるいは現場における有様を'再現するような実験室研究'の方法を確立することが、疾患に続く impairment や disability を予防するために必要である」と、強調された。

初日午後の後半は、「脳卒中」と「認知症」の2つの分科会が並行して開かれ、私は後者に参加した。分科会と言っても、こじんまりしたセミナー室

のようなスペースで十数人が1つのテーブルを囲み、主に韓国内研究者(大学院生を含む)による発表に対する、とても暖かく和やかな雰囲気の良いディスカッションを行った。格式ばった雰囲気を進めるよりも、はるかに実質のある fruitful な討議ができたと感じた。例えば園芸療法の効果についての発表で言えば、こういう感じだ(会議の公用語は英語)。「好きじゃない人にも強制するのかしら?」「まさか! やりたい範囲でぼちぼちやってもらっています。でも収穫を食べるのはみんな好きです(笑)」「じゃあ屋外での活動量には個人差があるわけね。それを測定できないかしら。」「Dr. Kageyamaの発表にあったアクチメトリーは使えそうね」「でも1台1500ドルもするんですよ。」「えっ! 収穫を全部売っても買えないわね(笑)」「活動の累積量を測るだけなら、もっと安い道具がありますよ、えーっと・・・(私は万歩計を英語で何と言うのか思いつかない) 田高先生、万歩計って・・・」「xxx!(台湾語でどう発音したか聞き取れなかったが、万歩計という日本語が通じたらしい)」「ああ、yyyなら安い!(その発音は韓国の方にも通じたらしい)」「研究者の国際協働は素晴らしいわね!(爆)」----- 東アジアは漢字文化圏であることを実感した。

二日目朝には、第二の基調講演として、ソウル国立大学校医科大学 YH Suh 先生による「Dementiaの病因と治療についての近年の潮流」という病理学のレクチュアがあった。その後は同校看護大学の MA Choe 先生による「急性虚血性発作後の初期における軽度運動の下肢筋への効果」、同じく S Choi 先生による「脳卒中後の抑うつ状態、感情失禁、易怒性への Fluoxetine 療法: 二重盲験法による研究」(Fluoxetineは日本でもプロザックという商品名で使われている)と続き、最後にメリーランド大学 M Shaughnessy 先生が「脳卒中後の機能回復」と題して運動機能回復のための新しいパワー・リハビリ法を紹介し、二日間の幕を閉じた。

3. 感想

全体としてきわめて充実感のあるカンファレンスだったが、特に2つのことが印象的であった。

一つは、韓国における看護界の力の大きさだ。脳科学研究の一角を看護界がしっかり押さえて研

究費を獲得し、これだけの国際会議を開催しているという事実。看護研究者が、脳卒中後の抑うつに対する薬効治験でコントローラーを務めていたり(個々の対象者が「新薬またはプラセボ」を与えるのに適切な状態かどうかを判定するのは医師の役目だが、研究計画の全体を立案管理しデータを分析する研究者は医師でなくてもよい-----日本でも生物統計学者が担っていることは多い)、人為的に脳血管障害を起こさせたラットを使い「脳卒中後ただちに運動リハビリを開始することの効果」を見るという動物実験を報告していたり、ということも印象的だった。日本の看護研究者も、生物行動学の分野でもっと幅広い活躍が可能なのではないかと思う。なお、これは余談だが、韓国科学技術アカデミー会長(文部大臣でもある)から招待講演者一人一人に感謝状と記念の盾をいただいたことも、驚きであり感激であった。

もう一つ、万歩計の話にも象徴されるように、東アジア諸国の看護研究者は多くの視点や感性を共有しているという印象を得たのも、面白い発見であった。私は施設に入所している認知症高齢者の夜間排尿(失禁)について、新しい排尿モニタリング法の紹介と、夜間の排尿援助による睡眠妨害のエビデンスに関するデータ紹介をしたのだが、これに対して米国の研究者は「米国の教科書では、睡眠を妨げないために夜間はおむつ交換などをすべきでない、と書いてあるものが多い」と教えてくださった。ところが東アジア諸国の研究者は一樣に、「おむつをさせっぱなしというのは、その人の尊厳にかかわる問題なのではないか? できるだけそうはしたくない。」と考えていたのだ。なお、これは偶然の符合かもしれないが、回想法を用いた認知症高齢者のQOLの活性化について、東京と台湾から同時にそっくりの報告が発表されたのも、興味深いことであった。回想法自体は東アジアに固有の方法ではないのだが、実際の高齢者施設内での適用方法や、聴き役(ここでは看護者)の高齢者への接し方には、似たような文化的伝統があるのかもしれない。限られた経験に基づく私の直感が正しいかどうかかわからないが、アメリカ的伝統のほうが"高齢者が何をするか/できるか"(doing)ということを中心とするのに対し、東アジア的伝統では"高齢者がどのように在るか"(being)をいっそう重視する(と言ってもあくまで

相対的な差だが)、という傾向を感じました。このことの真偽については、自分の今後の課題として考えてゆきたいと思う。

以上のほか、主催者側の暖かいホスピタリティに深く感銘を受けたことは、言うまでもない。特に、大学院生が高い能力と意識(使命感)をもって、カンファレンスの最初から最後まで素晴らしいサポートをしてくださったことを、特記しておきたいと思う。お招きをいただいたソウル国立大校看護大学の皆さまに、紙面をお借りして心より御礼申しあげたい。



著者連絡先

〒870-1201
大分市大字廻栖野 2944-9
大分県立看護科学大学 精神看護学研究室
影山 隆之
kageyama@oita-nhs.ac.jp